

病害虫情報 No. 3

麦類赤かび病の防除を徹底しましょう！

赤かび病の発病粒が0.0%を超えて混入すると、農産物検査に合格しません。
必ず防除を行い、発生防止に努めましょう。

[現在の状況]

- ① 大麦の出穂以降は曇雨天が続き、本病の感染・発病に適した条件であった。なお、5月上旬現在、六条大麦では一部で発病を確認した。
- ② 5月上旬現在、小麦はおおむね開花期にある。本病原菌は、開花期から10日程度の間が最も感染しやすく、この間に降雨があり、気温がやや高くなると本病の発生が多くなる。向こう1か月の気象予報(5月4日発表)によると、天気は数日の周期で変わり、気温は平年より高いと予想されており、今後の気象には十分な注意が必要である。
- ③ 農業研究所の調査では、本病原菌の胞子の飛散開始時期は平年より早く、飛散量は平年より多い(4月26日現在)。このため、降雨があると発生が多くなると予想される。
- ④ 凍霜害を受けた麦は本病に感染しやすく、被害部位から発病が広がる恐れがある。

[防除対策]

- ① 六条大麦は、収穫前日数に注意しながら、可能であれば追加防除を行う(表1参照)。
- ② 小麦は、防除適期が開花期であるので、時期を逃さぬよう薬剤散布を行う。また、特に感染しやすい時期にあるため、1回目の散布後も降雨があれば、7~10日後に2回目の散布を確実にを行う。(表1参照)
- ③ 昨年発生が多かった地域では、特に注意が必要である。
- ④ 追加防除を行う際は、出穂期以降1回しか使用できない薬剤(トップジンM水和剤、ベルコート水和剤)があるので注意する。
- ⑤ 倒伏や収穫の遅れにより発生が助長される恐れがあるため、適期収穫に努める。また、収穫後は速やかに乾燥・調製を行う。

表1 赤かび病に登録のある主な薬剤(平成19年5月1日現在)

薬剤名	希釈倍数	収穫前日数-本剤の使用回数	対象作物	有効成分-有効成分の総使用回数
トップジンM水和剤	1,000~1,500倍	30-3 (出穂期以降は1)	麦類(小麦を除く)	チオファネートメチル-3(種子1, 出穂期以降1)
		14-3 (出穂期以降は1)	小麦	
ベルコート水和剤	1,000~2,000倍	21-3 (出穂期以降は1)	小麦	イミダゾール-4(種子1, 散布及び無人機散布は合計3, 出穂期以降1)
ストロビーフロアブル	2,000~3,000倍	14-3	麦類	グリキシムメチル-3
コロナフロアブル	400倍	- - 5	麦類	硫黄-5
チルト乳剤25	1,000~2,000倍	3-3	小麦	プロピコナゾール-5(根雪前2, 春期以降3)
	1,000~2,000倍	21-1	大麦	

※ 農薬を使用する際は、農薬ラベルに記載の使用方法・注意事項等を確認のうえ使用してください。
また、薬剤散布の際は、周辺作物等への飛散(ドリフト)に十分注意してください。